

私の名前は「包大師」—与えられた痛み、導かれる夢と日常実践

サランゴワ

キーワード：痛み、夢、守護霊、感覚、タヤ・ママ、弟子入り、憑依、師匠

はじめに

2019年8月に上梓した拙著『ブォ・シャマニズムの現在—内モンゴル・ホルチン地方の新地平』において、シャマンのライフストーリーを取り上げ、シャマンになる過程を記述・分析を行った。本稿は、それを踏まえて、当事者が痛みと夢、感覚をいかに認識しているか。それらの体験が、その後の生き方、すなわち、人間関係、思考、言動をいかに影響しているかを本人の語りに基づいて再現し、分析する。

本論の主人公は、中国で最も利用されている SNS である WeChat (微信) で、「包大師」(図2を参照)と名乗る内モンゴル東部ホルチン地方の通遼市ホルチン左翼後旗出身のシャマン(1973年生、男性)である。その名が、WeChat で知り合った人々の間で名前として呼ばれている。

本文に入る前に、まず、シャマン「包大師」の守護霊を紹介する。亡くなった人間の霊と動物の霊が憑いている。

1) 亡くなった人間の霊

① シャマンにしたのは、(母方の)祖母の父方の叔父である。「包大師」から見て、4代前の先祖である。名前は、白エルデニゲレル(実名、1885-1962、図1)で、干支は酉である。「包大師」は、この守護霊をタヤ(曾祖父)・ママ(=ラマ=僧侶の尊敬語)と呼んでいる。

② 父から数えて、18代前のシャマンだった女性先祖、名前はフボルガ(実名)で、2013年に口を開いた(体に憑依して、質問に答える)。ブォ守護霊と呼んでいる。

2) 亡くなった動物の霊

③ ロス守護霊：(1) 黒いロス(蛇の精霊)は、ブォ守護霊に憑いていた。東の天から由来する。(2) 白いロス、黄色いロスは、生前のタヤ・ママに憑いていた。西の3つの方向から由来する。ロス守護霊にロスの言葉がある。すなわち、降臨すると憑依言語、異言語をしゃべる。

④ (胡仙と呼ばれる) 狐の守護霊。生前のタヤ・ママに憑いていた。「包大師」によれば、ラマに狐の精霊が助手として憑くことがある。狐の守護霊は言葉がある。ロス守護霊と言葉が異なる。タヤ・ママが生前、狐の守護霊に葉を呼び寄せてもらっていた。ロス守護霊と狐の守護霊は、ホルチン地方では一般的に、どこで、何百年、何千年、さらに何万年修行している¹と自己紹介するが、「包大師」

¹ ホルチン地方のシャマンによれば、これらのロスと狐の精霊は、基本的に、地元に棲息している

のこれらの守護霊は、このように告げず、やってきた方向を告げる。



(図 1)

写真は白エルデニゲレルことタヤ・ママの遺影。

還俗されたことが伺わせる。

「包大師」が 2019 年 6 月に提供。

1. シヤマンへの道—「包大師」の守護霊とライフヒストリーから

夢と憑依を人類学的に分析した田辺繁治は、「つまり私は、夢や憑依の体験が現実の顕在的な日常生活の実践と深く結びついているのだということを示そうと思うわけです」[田辺 2004]。本論で取り上げる「包大師」のライフヒストリーにおいて、夢と痛みを含めた感覚が日常実践、さらに、人生において、大きな影響力をもち、ある意味では、それによって生かされているとも言えることができる。

(1) 先祖と守護霊の生前について

ホルチン左翼後旗のシルタラ・ソモ（行政単位、郡に当たる）のブルル（buglu）というところに住んでいた。5代前の先祖は、赤いジンス²を持ったタイジ（貴族）だった。曾祖父（生没年不詳、37歳で没。本論で、歳を数え年で計算）は、5人兄弟で、自分の曾祖父は末っ子で、ナスンサンと言う。曾祖父に2人の男の子と2人の女の子がいた。長男がわたしの祖父（1904-1998）である。名前は、ビリグンダライである。娘5人に、4人の男の子に恵まれ、父親（1942-1996）は次男である。父親はセワンジャブと言い、母親（1951年生）は翠美である。祖父は、中医学の医者である。当時、中国の南の地方から天秤棒を担いでやってきた漢人を家に泊まらせ、それがその人の死ぬまで続いた。その人は、中医学の医者だったので、医術を20代だった父に伝授した。脈をとる方法、処方、秘伝の治療技術などである。わたしは、その漢人の名前を知らない。

祖母（1921-1999）は、白姓で、名前はボルガである。祖母の父方の叔父、すなわち私の守護霊はエルデニゲレルと言う。タヤ・ママ（エルデニゲレル曾祖父）が夢で告げてくれた生前の経歴は次のよ

蛇と狐の生霊あるいは、死霊であるが、修行している場所を名山や聖地を言うのが多い。また修行している年数をも多くいう。

² 帽子の上の宝石の色で、身分の象徴である。

うである。

4歳の時に、出家して、(ホルチン左翼後旗の) ゲンイ寺院のラマ(僧侶)となった。7歳のときに、ゲブヒ(僧侶の位)・ママとなった。祖母の家系は、代々ラマを輩出した。タヤ・ママは、寺院で経典と医学を学んだ。1950年代に、ホルチン左翼中旗の烟灯图村の寺院の首席ゲゲン・ホビルガン(高僧)・ラマとして招かれて行った。その後、ホルチン左翼後旗の衙門営子村(現ノグスタイ町)の病院で医者として勤めた。その後、ホルチン左翼後旗の現在のバヤンモド・ソモ(中国の郷、鎮に当たる地方行政単位)のハンデという村のタリヤチン・タラというところに仮小屋を造って住んでいた。1962年に現在のノグスタイ町のアルジン村で自害した。タヤ・ママに黒いロスが憑いていたので、骨の治療に優れていた。その後、父方の祖母の弟を後継者として選んだ。その祖父は、守護霊のおかげで、骨の治療、医学の知識を持っていた。タヤ・ママの生前使っていた治療用の医学用具がこの祖父のところにあった。

(2)「包大師」の生い立ちとシャマン病について

本人の語りに基づいて再現する。

1973年に教諭の父親と農民の母親のもとで長男として生まれたが、4歳になってやっと歩き出した。小学校に入ると、成績が優秀だった。12歳で中学校に進学したが、13歳のときに中退した。原因は、寮生活は苦しみの極限だったからである。学校の給食を食べると、胃が痛くて、腹が張り、湿疹がでる。頭が痛くてたまらない。家に帰ると治る。仕方がなく、学校を辞めた。当時は、学校の食が合っていないと思込んでいた。14歳のときに、父親が、新しい家を造ってくれた。自分は手伝った。しかし、体は上から下へ痛くてたまらない。15歳のときに、家を出て、商売したが、まったくうまくいかなかった。19歳(1991年7月)のときに、重度の睾丸炎になり、腫れて、痛みのあまり、数日間失神の状態だった。9月に、盲腸炎で入院して、手術を受けた。

1996年に父親が病気で亡くなった。亡くなる直前に、「仕事に励み、早起きして、夜遅くまで働け。祖父母とお母さんの言うことを良く聞き、弟(1975年生)と妹(1987年生)の面倒を見なさい。学校を中退したので、良く世の中を観察し、年上の人の教えを進んで受けなさい」と言われた。27歳(1999年)のときに、人に紹介されて、シルタラ・ソムの両家村の白銀花(仮名、1974年生、図3)を妻として迎えた。翌年に男の子に恵まれた。当時は、農耕と数十頭の羊で生活を立てていた。28歳のその年から、痛みが増し、ひどくなった。病院を回り尽くしたが、ことごとく見放された。特に頭と胃が痛く、関節の痛みがひどい。すべての機械の検査を受けても、病気が見つからない。その後、腎臓結石になり、6個排出した。病気治療のため、家畜を売り、畑を貸し出した。すべての財産を投じた。家まで売って、転々と住まいを変え続けた。29歳のときに、村を洪水が襲った。また、村の人口が増えたので、政策によって、村から40戸が出て、新しい村を造った。当時、病弱で貧困だった自分に

政府が新しい村で、3間屋を造ってくれた。しかし、痛みは和らぐどころか、さらに増した。自殺しようと釘を飲み込んだが、そのまま排出した。一握りの針を飲み込んだが、死ななかった。困り果てて、妻にこれ以上迷惑をかけないと思って、離婚して、子どもを連れてどこかへ行ってくれとお願いした。息子の姓さえ変えなければ、再婚するなり、何をしてもいいと言った。そのとき、もし妻が子どもを連れて、家を出たら、自ら命を絶とうと決心していた。しかし、妻は泣きながら、「自分は死んでも包姓の家の死霊（チトグル）になる。あなたを置いてどこにも行かない」と言った。

31歳のときに、夢に、祖母の父方の叔父エルデニゲレル・タヤ（曾祖父）・ママ（ラマ＝僧侶）が現れて、いろいろ教えてくれた。当時、母親は、タヤ・ママ（曾祖父ラマ）の写真を保管していたので、見たら、同じ人と判明した。仏教、シャマニズム、レイチン、骨の治療、骨の数、血管の長さについて、いろいろたくさん教えてくれた。

息子が4歳（2000年）のときに、旗の中心街の保育園に通わせていた。母親が面倒を見てくれていた。そのとき、自分の手に1000元があった。妻が息子と母親に会いに行こうとしたとき、その金を使って、母親、息子、そして妻自分のために服を買うよう勧めた。しかし、妻はそうすることなく、その町に住む白金蓮（仮名、1971年生）という名の占い師のところに行って、わたしのことを占ってもらったら、シャマンになる運命の人だと言われた。妻が帰ってきて、「病院の治療をいくら受けても治れないので、シャマンの治療を受けてみよう」と延々と勧めてくれた。「その金を占い師に上げるより、自分に服を買って着たらいいだろう。美味しいものを買って食べたほうがましだ」と言ったが、妻が泣き止まないの、仕方がなく一緒に占い師のところに行った。実は、長年、自分の体が痛みの連続で、次から次ぎに痛みが襲ってくるのを知っている知り合い、親戚がシャマンの治療を受けるよう助言してくれた。また、占い師やシャマンが、将来自分たちと同じく人をみたり（透視）、治療したりする人になる、自分たちよりもできる人になると言われたが、まったく信じなかった。ひたすら肉体的な病気だと思い込んでいた。

当時の自分は、寝たきりの状態で、自力で動ける状態ではなかったの、妻が村の人に協力を求めると6人が来てくれた。そして、担架で運ばれて占い師白金蓮の家に向かった。庭に入ると、占い師が窓越しに私達を見て、素足で走って出てきた。しかし、当時の自分は、自己コントロールができず、占い師を見てすぐ、怒鳴りだした。「あなたは、狐と鼬を利用して（その霊力で）人を騙している」白金蓮が唖然となり、後退りながら家の中へ入って行った。自分は、占い師の家に入ってすぐ失神した。目が覚めると、占い師の首を抱いて泣いていた。白金蓮に、祖母の叔父、すなわち、エルデニゲレルというタヤ・ママに後継者として選ばれたことを開示された。

白金蓮が次のように託宣した。「ボルハン（仏教の仏の画や像）を祀りなさい。あなたはこの道の人間（シャマンになる人）である。私は、あなたを弟子として受け入れることができない。あなたの守護霊は強すぎる」私の夢に、体の大きい、3の仏の像が現れたことがある。それを伝えると、それ

だけで、どの仏かを知らないで、自分の薦める仏を祭ればよいと言われた。薬師如来、関帝、観音菩薩、陽光菩薩（漢人の民間信仰の太陽神）、黒媽媽（黒い蛇の精霊）など、13の仏と精霊の名前を挙げてくれた。当時は、お金がないので、仏具を販売する店（中国語で仏店と呼ぶ）を経営している友人から掛けで買って来た。白金蓮夫婦は車があったので、家まで来てくれて、祭壇を設けてくれた。しかし、不思議なことに、その日の夜に、祭壇がある部屋から音が出て止まらないので、妻が見に行ったら、仏像が床に下りていた。それを受けて、すぐ、白金蓮に電話して、説明して、仏像を持って帰るよう頼んだ。実は、その日の夜にもう1つの出来事があった。すなわち、占い師からもらったサイグ（白い布の呪薬）を言われた通り、私が寝た後に、妻が頭の上で燃やそうとしたところ、妻が失神して倒れた。そのとき自分が寝ているのに、この光景を見ている。（守護霊が）目に見せてくれたと言うべきだ。なぜなら、本当に寝ているからである。守護霊が見せてくれた。

そして、妻の名前を呼び続けると、意識が戻った。翌日早朝、白金蓮夫婦がやってきて、頼んだとおり、仏像を持ち帰ってくれた。白金蓮は次のように言った。「私とあなたは、健康であるあなたの妻を殺すところだった。あなたのタヤ・ママがわたしの面子を立ててくれなかった（やったことをこのような形で否定している）。将来あなたの前身ごろの下を潜る³」私は、「タヤ・ママは、僧侶にしか過ぎない。（霊力で）仏像を床に落とすことが理に合わない」と思った。タヤ・ママは、白金蓮が安置してくれた仏像を落としたのは、2つの理由があると考える。①は、白金蓮の守護霊は狐の精霊である。タヤ・ママが活着しているとき、シャマンの守護霊は亡くなったシャマンの霊が主流だった。タヤ・ママが動物、特に狐の精霊を守護霊とするシャマンを受け入れていない。②はタヤ・ママが生前祭っていた仏ではないからである。その後、白金蓮の助言を受け入れて、寺院を巡った。それによって、自力で歩けるようになった。

34歳の（2005年）冬、雪が降ったので、馬に乗って、兎猟に出かけた。白い兎を追って駆けているときに、馬から落ちて、馬に引きずられて、足が脱臼してしまった。歩けないので、雪の上に座りこんでいるとき、寝てしまった。そして夢を見た。白い頭（白髪）の人が頭のところに現れて、「これを治療しないと何を治療するか、あなたの夢にわしがいろいろ教えた。できるはずだ。雪を丸くして患部を擦った後、このように引っ張ると元の位置に戻る」と教えてくれた。眼覚めてやってみたら、本当に治ったので、起き上がって、馬に乗って帰宅した。その後、夢で、「五海」（ウーハイ）という市に行くように言われた。中国語の発音が似ているが、字が違う都市の名前である。内モンゴル西部の烏海市のことである。そこにタヤ・ママの兄弟の子孫が住んでいる。夢に、2つの貨物列車が現れて、1つの列車に玉蜀黍が満々と詰まっていた。もう1つの列車の中は肥料だった。それは、私が烏海市に行くと食べるものがあるという意味だと思っている。夢で、タヤ・ママが脈を取る方法を教

³ ホルチン地方で、弟子入りの際、あるいは尊敬の念を込めて、前身ごろの下を潜る習慣がある。その守護霊に対する尊敬の念の現れである。

えてくれた。そのため、今脈診ができる。

タヤ・ママの夢で教えたとおり、他人のため、骨の治療、例えば、捻挫、骨折を握って治療した。2000年に烏海市に妻を連れて行った。2001年に実家に戻ってきて、2003年に再び行って、樹を植える仕事をした。妻は、車を洗う仕事に従事し、月給は、700元である。夢で行きなさいと言われたところに行くと本当に寺がある。その後、夢に言われたとおり、青海省の寺院に行くところある高僧に、タヤ・ママの霊魂が頭の上に憑いており、生前位の高いラマだったことを教えられた。ラマになることを勧められ、そうすることによって、タヤ・ママである守護霊の力がより発揮できると言われた。オルドスの寺院でラマになる儀式を行ってもらって、在家ラマとなった。ある日、樹を植えているとき、人が車で自分を迎えに来て、待っている人がいると言って、ホテルへ連れて行った。入ると、ある高僧が、すぐ靴と靴下を脱いで、素足で自分と握手して挨拶した。自分が慌てて、跪くと、このようにしないように言われた。助手に、黄色ハダック（礼巾）を持ってこさせた。そして、磚茶⁴と銀の碗をその上に載せて、跪くよう言われた。この説明を受けて、弟子入りしなさいという意味であることを分かった。仏教では、両膝をつけて跪くが、自分は、片膝をつけて跪いた。それは、シャマンに弟子入りするときのやり方である。当時は、自分がどうしてこのように跪いたかを知らなかった。すると高僧が笑いながら、「はい、それで合っている」とおっしゃられた。高僧の夢に（タヤ・ママが）わたしを探すよう言われたそうである。玉樹地震⁵によって、800人以上の孤児ができた。師匠（高僧）が読経によって、得られた金で孤児を支援した。その事業のスタッフを2年あまり勤めた。その後、師匠に言われて、オルドスの金持ちやその子どもを動員して、仏像や仏塔を造らせた。師匠が私を蓮花台という寺院の住職にした。中心たる仏塔を造営するとき、師匠と私と他の2人で、宝瓶を埋める行事を行った。その後、体が苦しくてたまらないので、住職を辞退して、烏海市に戻った。この高僧師匠が、SNSの名前を「包大師」にしてくれた。それは、守護霊が生前高僧だったことと他の守護霊もそれなりの力がある。守護霊たちの教えを守り、自らを律し、その能力を発揮していけば、間違いなく、大師にふさわしい存在だと思ったからである。

【夢での導き—与えられた夢】

家に帰ってくると、寝ているときに、トランスに入る（守護霊が降臨する）。夢の中で、ブオの服を着、太鼓を持って、山や川を回り、雲に乗って、飛翔する。昼は、クライアントのため、骨の治療を行うと体が軽くなり、気分がよい。クライアントのお礼の金を取ると、何らかの形で出ていく。とにかく、クライアントの金を取ってはいけない。

夢に（タヤ・ママが）次のように告げてくれた。この（シャマンの）道は、火の食べ物（クライア

⁴ モンゴル語で、ヘビン（型）・チェと言ひ、紅茶などを型に入れて、固めたもの。主に、ミルクティを作って飲む。

⁵ 2010年4月14日、青海省玉樹チベット族自治州の玉樹県で発生した地震である。

ントの苦しみを取り除くという意味)である。クライアントから金を取ってはいけない。その金を生活のために使ってはいけない。善を施すということである。毎晩のほど寝ているときにトランスに入って、体が休められないので、妻に、「タヤ・ママを体に正式に招いて、憑依させよう。守護霊が、正式に招くことを期待している。それをしないと、何をやってもうまくいかないし、体も苦痛を受ける」と伝えた。そして、2008年に、シャマンに弟子入りするため、ホルチン地方に戻ってきた。フレ旗のラマに次のように言われた。「白金蓮(シャマン)は、あなたの守護霊を自分の守護霊の祭壇に止まらせて、あなたのところに行かせてくれない状態だ」しかし、わたしは、その言葉を信じなかった。彼女がそのような力がないことを知っているからである。

あるシャマンに弟子入りして、守護霊(タヤ・ママ)を招いて、自分の体に憑依させることにした。しかし、夜になると、雄鶏や狼の鳴き声が聞こえる。つまり、自分が弟子入りしたシャマンは、動物を祭っているということである。狐など動物の精霊を祭っている人の家に入ると、臭いも異なる。動物を守護霊とするシャマンの家に自分は降りないとタヤ・ママが夢で教えてくれたので、そのシャマンのところに弟子入りすることを止めた。その後、弟子入りするシャマンが見つからないまま、数年を過ごした。その間、骨の治療を行うが、体がずっと不調だった。それは、シャマンに弟子入りして、守護霊を正式に招き呼んでいないからである。

2013年、正月14日、夢で、北の方向に行くよう言われた。行くところの家が土作りで、窓が青色で、ガラスが小さい。一番右側の窓の南西のところのガラスが三角に割れている。その妻(1958年生、図19)の髪の毛の分け目が蓮の花に似ていると見せてくれた。行くべきところの村の名前を教えてください、その家のシャマンの名前をも教えてください、どこから探すかと困った。当時、母親と妹は、通遼市(ホルチン区)に住んでいた。そこに泊まった日の夜、夢で、天に昇った。(タヤ・ママが)自分を連れて天に行った。10人が八角の井戸を囲んで、会議をしていた。2人が立って、剣を持って、見張り役をしていた。残りの8人は黒い服を着ていた。2番目の人が自分に向かって、「なぜわしを探しに来ないか」と言われて、眼覚めた。どこから探すだろうかと不安になったが、とにかく、行ってみようと、(ホルチン左翼中旗の)シエベルト町に行くバスに乗ったが、気分が優れないので、シエベルト町からヨリンモド町に行くバスに乗った。先生を探すのが目的だが、実は、どこに行くかを自分も知らない。とにかく、夢に教えてくれた師匠を探し続けた。夢で、旅で白髪の女性が行くところを教えてくださいと告げてくれた。ヨリンモド町に着いて、バスを降りた。どこへ行くかを知らないで、呆然として立っていると、電動三輪車で人を運ぶ仕事をしている女性が寄って来て、どこへ行くかと尋ねてくれた。事情を説明すると、良い師匠のところへ案内すると言われたので、三輪車に乗った。着いたのは、名シャマンである月亮(仮名、1954年生、女性)の家だった。

庭に入って、その家に向かっていると、(タヤ・ママが)月亮シャマンの顔を見せてくれて、「この人はあなたの師匠ではない」と感じさせる形で教えてくれた。しかし、大人である自分が、人の庭に

入って、挨拶もしないで出て行くのは良くないと思って、家に入った。月亮シャマンの主人が、月亮シャマンは不在で、村人の家で麻雀をしている、夕方 17、18 時になると帰ってくると説明してくれた。30 分後、例の電動三輪車を運転手が戻ってきて、「ご実家の人が待っている」と言われて、不思議に思った。すると、月亮シャマンの夫が、「貴方を金徳（仮名）シャマンのところに案内しようとしているのだろう」と言った。その家から出てきて、庭に歩いていると、「西北の方向へ行きなさい」と耳に教えてくれた。女性運転手が自分を呼びに来た理由を教えてくれた。私を月亮シャマンの家に案内した後、電動三輪車が 100m 進んで、どうしても動かなくなったという。これを受けて、運転手が、訳があると思って、自分を呼びに来たという。私が、その三輪車に乗ると、動き出した。そして、西北の方向へ進んだ。当時は、誰の家に行くのも分からないまま、とにかく進んだ。数分走って、道路で、白髪の年寄りの女性と出会って、夢で見た窓の様子を説明して、そのような家があるかと尋ねると、「その家が今、煉瓦の建物に変わっている。3 間屋が 3 つ並んであって、真ん中の方は、貴方が探しているその人の家だ」と説明して、行く方法を教えてくれた。この説明を受けて、運転手が、「分かった、誰の家かを分かった。貴方の師匠を分かった」と言って、シャマンの家へ向かった。シャマンの家に着くと、テムル（仮名、1956 年生、男性、図 18 参照）・シャマンが合掌しながら迎えに出てきて、「10 年前に夢に入った弟子である。やっとやってきたんだ。黄色の光（守護霊の光）を放して着いたのを見て、すぐ分かった」と喜びを隠せなかった。庭にシャマンの妻が立っていた。夫婦の顔が事前に夢で見せてくれたその通りだった。運転手に 10 元を渡そうとしたところ、「貴方様のお金をもらってはいけない」と言って、どうしても受け取らなかった。シャマンは、運転手に 200 元渡した。家に入った瞬間、眼が見えなくなった。仕方がなく、シャマンの服をつかんで、オンドルに座って、しばらくたってから見えるようになった。シャマンに伝えると、「家は、ボームル・テングリ（天神の 1 つ）を祭祀していることによるものだ。ボームル・テングリと私の守護霊はハトゥ（hatu/hatagu=固い）」と説明してくれた。

手洗いの場所をうかがうと、庭の南西のところにあると教えられた。庭の北東部は、黒いロス（黒い蛇の精霊）の宿り場と説明された。手洗いから出てくると、タヤ・ママがシャマンの住宅の上に、シャマンの守護霊と祭っている神々の様子を一行に並べて見せてくれた。続いて、夢で見せてくれた窓のことを伝えると、シャマンは、土作りの住宅を壊して、改築したことと、窓がまだ残っていることを説明してくれて、倉庫に置いてある例の窓を見せてくれた。夢で見たそのままだった。

テムル・シャマンは、タヤ・ママを先に招いてくれようとしたとき、その妻が、先に、黒いロスを招き、タヤ・ママの道案内役にしようと、黒いロスを先に招くことになった。テムル・シャマンの家に着いたその日から、毎晩、夢でその家の弟子衆の守護霊について、教えてくれる。黒いロスを招いて、3 日目の夜に、口を開いた。黒いロスが降臨すると、冷たい気が流れる。すると、師匠がすぐ厚着して、ロス守護霊に挨拶を行った。当時は、意識を保ったトランスだったので、自分もその冷たい

気を感じた。しかし、ロスには、師匠の家で1回もモンゴル語をしゃべったことがなく、ロスの言葉でしゃべった。師匠はロスが言葉を分かるし、操られる。自宅でロスを招請するとモンゴル語でしゃべる。

黒いロスが口を開いたので、師匠テムル・シャマンが喜んでくれて、料理屋に連れて行ってご馳走してくれた。これまで、師匠が自ら進んで、弟子に奢ったことが まずなかった。自分にそのようにしてくれたのは、夢に入ったからということだった。そのとき、師匠がもう1人の女性弟子を招待した。女性弟子が師匠の守護霊がいかに強いかという説明してくれたが、自分は、それほど強いと思わなかった。続いて、タヤ・ママを招いて、体に憑依させることになった。14晩続いて招き呼んだでもまったく降りてこなかった。立ったところから動くことすらなかった（動き出すと守護霊が憑依した証）。15日目の夜、師匠が自らのレイチン⁶守護霊を招き憑依させて、その守護霊の力で、タヤ・ママを私の体に降ろそうとしたが、結局タヤ・ママが降りてこなかった。そして、タヤ・ママが耳元で「ここで降臨しない。しかし、招き呼ぶ回数を重ねることが必要だ」と説明してくれた。これを受けて、2ヶ月あまり呼んだところ、タヤ・ママに、(青海省の)グンブン寺に行って、読経を聞くように言われた。烏海にある家に寄ってからグンブン寺に向かうとして、家に着いた夜、夢にタヤ・ママが現れて、「そこ(師匠の家)に降臨しない。再び招かないでほしい。ブォ守護霊も口を開かない」と言われた。その後、自分にお経を教えてくれた高僧の助言を仰ぎ、どうすれば、タヤ・ママが降りてくるかを伺った。タヤ・ママは、生前高僧だったので、私が仏間(祭壇を設置している室)を清め、自らを清めて、49日間高僧の教えてくれたお経を唱えるとタヤ・ママが自ら降臨する。タヤ・ママは、生前、ラマだったので、太鼓の音で降臨しないとだろろうと言われた。それを受け入れて、本当に、49日間家を出ることがなく、お経を読み続けた。ご飯すら妻が仏間に運んでくれた。49日の夜、タヤ・ママが急に降臨して、自己紹介(口を開く)をしてくれたという。母親が守護霊に跪こうとしたが、(タヤ・ママが)させてくれなかった。妻が跪いて酒を捧げると、一回目は、妻に向かって酒を吹きかけ、二回目は家に吹き掛けて清めてくれたという。当時自分は自意識を失っていた。何も記憶していない。その後、タヤ・ママが、夢に現れて、酒を3杯南西方向に向かって撒き散らして捧げて、西の聖地(モンゴル語で、ジョ・ギン・オロンと表現した)から招き呼んでいると祈りを捧げた後、金剛鈴を鳴らしながら般若心経を読んでいけば、降臨すると教えてくれた。また、墓があると教えてくれた。タヤ・ママが自らの甥っ子を後継者にした。その甥っ子が亡くなった後、私を後継者として、選んだという。生前使っていた仏具や医学用具が誰のところにあるか告げてくれた。その後、教えた通りに、タヤ・ママを招き寄せた。妻に事前にタヤ・ママがわたしに憑依したら(トランスに入ったら)、ブォ守護霊とロス守護霊、胡仙守護霊をいかに招くかを質問するように頼んだ。すると、

⁶ 仏教に帰依し、経文を唱えて守護霊を呼ぶホルチン・シャマンの一種。守護霊が降臨すると印を結ぶ踊りを披露する。現在は、基本的にシャマンを招く歌を歌って守護霊を呼ぶ。

タヤ・ママが、上述した守護霊たちを師匠（テムル・シャマン、図 18）の家に行き、招き呼び、回数を重ねる必要がある。動物の守護霊は、言葉をしゃべらず、仙の言葉（異言語）でしゃべると説明してくれた⁷。このお告げを聞き入れて、その後、また、ホルチンに行って、師匠のところ、4ヶ月間泊り込んで守護霊を招き寄せた。ブオ守護霊が、生前住んでいた場所を「ボルハン・ハルドンを頼りに」と教えてくれた。そのとき、ちょうど、モンゴル国の実業家の妻が病氣治療のため、内モンゴルに来ていた。彼女をシャマンへの道へ導いてくれた白金蓮に紹介してあげた。恩返ししようと思った。治療して本当に良くなったので、今度は、モンゴル国の実業家の妻が白金亮夫婦と私をモンゴル国のボグダ（聖なる）山の祭祀に招待してくれた。行ってみたら、ボルハン・ハルドン山（『元朝秘史』に登場するチンギス・カンが祀った山）の祭祀だった。「包大師」は、普段自宅で治療を行っているが、クライアントに招かれて相手の家へ向かうこともよくある。

「包大師」は、ホルチン地方に数人の弟子がいるので、毎年数ヶ月間、ホルチン地方で弟子を育てながら治療を行っている。タヤ・ママの教えに従って、脈を取り、薬を処方する必要がある場合、クライアントに薬の名前を教えて、市販から購入して服用することを勧める。タヤ・ママの力で物理的な症状を治療するほか、チャルマ・オットロホ（魂を強くし、運を良くする）治療、仏教と関係があること、例えば、お経を唱えると良いとか、また、病因の開示に力を発揮してもらうこともある。悪霊を追払う、精神的に異常をきたしている場合ブオ守護霊に頼る。骨の治療は、ロスに頼る。守護霊同士は、仲が良く、それぞれの得意な分野を発揮しているという。



（図 2 右側）「包大師」シャマン（2019 年）。（図 3 中央）「包大師」シャマン夫婦（2019 年）。

（図 4 右側）「包大師」の守護霊の祭壇。仏像は、左から陽光菩薩（道教の太陽神）、薬師如来、観音菩薩である。陽光菩薩の前に安置しているのは、守護霊であるタヤ・ママの遺影で、右側の写真は、

⁷タヤ・ママが他の守護霊の意思を心得ていることから、霊界でこれらの守護霊と交流はあることが伺われる。「包大師」もこのことを分かっていたので、質問するよう妻に頼んでいる。ここで、タヤ・ママは霊界の媒介者の役割を果たしている。その妻は、タヤ・ママが、「包大師」に降臨すると、直接コミュニケーションを行い、退出後、タヤ・ママと「包大師」との間で媒介役を務めている。

高僧師匠である。すなわち、現世の師匠と守護霊師匠を同時に祭祀している。

2. 分析—感覚と夢

シャマン「包大師」のライフヒストリーにおいて、2つのキーワードがある。それは、痛みを含めた感覚と夢である。タヤ・ママによって、身体的な痛みを受け、夢によって、守護霊であるタヤ・ママの存在を認めた。また、夢によって、脈を取る、治療技術と治療方法を身につけた。むしろ、これらを与えられたと表現したほうがより正確だろう。「包大師」に次から次に襲ってくる痛みを伺っているだけで、体が震える思いになる。タヤ・ママは「包大師」の日常実践を規範し、行動を制約している。クライアントからお礼の金を受け取ると何らかの形で出ていくことが事実であるが、それによって、どうすればよいか気づく。守護霊は、夢と起きているときに、痛覚、視覚、聴覚、皮膚感覚、臭覚で導いている。

「包大師」をシャマンにしたのは、亡きラマの霊である。しかも、自ら命を絶ったラマである。ホルチン地方のシャマニズムの概念に基づくと、人生の途中で亡くなった死霊は、悪霊になりやすい。転生できず、悪霊になり、人に取り憑いて苦しめると言われる。しかし、「包大師」がタヤ・ママと称する守護霊は、生前悟りを開いた高僧だった。ラマとしての知識と医療技術があったことをその生前の経歴からも伺える。しかも、自ら命を絶ったことも理由がある。そのため、死後も、霊魂という形でその性質が保たれている。ホルチン地方で、2000年ごろまでは、亡くなったシャマンの霊魂が後継者を探し、シャマンにすることが主流だった。今は、亡くなったラマの霊、蛇の霊、狐の霊に選ばれてシャマンになることが増加し、自然化しつつある。タヤ・ママがその一例である。「包大師」を後継者として選んだので、シャマンの伝承から、身体感覚を通して、シャマンの質を受け継ぐ。また、タヤ・ママの生前の身分は、ラマであるため、ある高僧にも夢を見せ、「包大師」を弟子として受け取ることを願った。そのため、「包大師」は、現世では、シャマンでありながら、仏教とも深く関わっている、仏教とシャマニズムを併せ持つ存在である。夢と憑依を通じて、タヤ・ママの生前のしぐさが「包大師」に現れている。タヤ・ママの遺影を見る限り、「包大師」が良く似ていることが分かる。しかも雰囲気も似ているように感じている。これは、今までの参与観察と参与感覚から言えよう。この感覚をその場にいたシャマンに伝えてみたところ、その通りであると言われたことがある。

選ばれた以上、シャマンになるため、どこに弟子入りすべきか。「包大師」本人も探し続けたが、守護霊であるタヤ・ママも探し続けたことを「包大師」に見せた夢からも分かる。しかも、ずっと前から探してくれていたことを夢で見せたその家が変わり、新築されたことから言える。タヤ・ママは「包大師」本人に夢を見せるだけでなく、師匠になるシャマンにも夢を見せている。そして、関係者の行動、用具にも影響を与えている。電動三輪車の運転手が「包大師」を月亮シャマンの家に案内した後、三輪車が動かなくなったことが、師匠テムル・シャマンの家を見つけるきっかけとなった。途中で出

会ったすべてが正夢となった。そのように、守護霊が導いたのである。

精霊や先祖の影響で機械が動かなくなる事例が一般人にも見られる。

ホルチン区で職を持つサイナ（1970年生、男性、図11、12）の先祖にラマとシャマンが存在したが、現時点では、これらの職能者が存在しない。サイナは、子どもの時から夢、感じさせる、痛みなど様々な形で先祖の影響を受けてきた。例を挙げよう。2005年の夏のある日の明け方、目覚める直前に、夢で、「貴方のバイクが動かない」と伝えられる。昨夜まで、何一つ異常がなかったので、夢は夢だとして、問題にしなかった。職場に向かおうとバイクのエンジンを入れようとしたが、起動しない。いくら試してもできなかった。仕方がなく、押しながら、自宅から300m離れたところにある知り合いの飲食店の前に止めて、亭主に事情を説明すると、「冗談だろう」と言って、手にして、動かしてみたらすぐ起動した。2007年の夏、サイナの息子（1997年生）が書籍を太鼓として叩いてシャマンの真似をすると、「止めて、（シャマンが）そんなにいいか」と叱った。翌朝になると、唇が腫れだして、職場に行くところではなかったという。サイナとその妻（1974年生）がシャマンを悪く言ったことへの罰として受け止めた。一連の出来事を経て、先祖の霊魂がずっとサイナの言動を監視し、その影響を受けていることが確かだと思うようになり、言動を慎むようになった。また、日常生活で困ったり、迷ったり、不安、不透明なことが生じた場合、先祖に夢で教えてくれるよう心の中で頼むようになった。すると、本当に教えてくれる。例えば、2019年9月下旬、医療保険カードが見つからなくなった。落とされたとは思わないので、妻に勧められたこともあって、家の中のありかを教えてくれるよう先祖に心の中で頼んだ。すると、2回に渡って、夢の中で、ある場所を見せてくれた。目覚めてそのまま行ってみたら本当にあった。サイナの妻（1974年生）がこのエピソードを語り聞かせてくれた時、先祖が、2回に渡って夢で教えてくれた思いやりの心に感動していた。サイナは、最初は先祖からの夢を受動的に受けたが、一連の出来事を通じて、啓示してほしいと能動的に思うようになった。夢は、日常生活に影響を与える確かな存在としてある。

現在、ホルチン地方でシャマンが増える中、夢に導かれて師匠を探して行くことが見られる。もちろん、気に入りのシャマンに弟子として受け入れてもらうため、「師匠の夢をみた」とうそをつく現象もある。次に、夢に導かれて師匠と出会った事例3つを上げよう。

【事例1 夢で守護霊が窓に現れた】

飲食店を経営する恵芝（1971年生、図5、6、7）は、2006年に急に失神して倒れ、救急車で病院に運ばれたが、病気を特定できなかった。その後、この症状がたびたび起こり、入退院を繰り返した。自分の不調をシャマン病と知らず、ひたすら現代病院の治療を2018年に師匠と出会うまで、12年間受け続けて、前後、120万円を費やした。これは、高額である。また、自営の料理屋で料理を作ると、油が飛び散って、火傷を負うことが発生し続けた。現代病院の治療で治らないし、火傷も起こり続けるため、シャマンのところに足を運んだ。シャマン病と言われた。呪薬を飲むと、効き目があるから、

シャマンの治療で治ると信じるようになった。火傷は守護霊が、この仕事を辞めて、弟子入りして、シャマンになることを期待しているメッセージと受け止めた。納得して弟子入りするシャマンが見つからなくて困っていたとき、あるシャマンに、西の3つの方向から師匠になる人を探そう言われ、毎晩祈り続ければ、師匠が現れるだろうと助言された。

祈り続けて、49日目の2018年旧暦6月19日（新暦7月31日）4時から5時の間、夢で、「包大師」の顔が窓に黄色の光と共に映り、この人が師匠になる人と告げられた。翌日から、SNSを通じて、シャマンの情報を探し、写真を集め続けた。本当にある日、自営の料理屋で働く女性スタッフが携帯にある師匠「包大師」の写真を見せると、「この人、この人だ」と叫んだ。当時、「包大師」は内モンゴル西部の烏海市にいたが、そのスタッフから連絡先を入手して、数度に渡って弟子入りする意志を伝え、「包大師」を恵芝の住む村に来るように願った。実は、「包大師」は、数人の弟子しかおらず、積極的に弟子を取っていなかったが、自分も夢で師匠を見つけたことを思っ、恵芝を弟子として受け入れた。恵芝は、「包大師」に弟子入りして、すぐ、不調から信じられないほど解放された。修行に専念するため、料理屋を閉めた。「包大師」を命の恩人と実感して、自分より年下の「包大師」夫婦を「父なる師匠」「師匠お母さん」（おかみさん）と呼んでいる。恵芝の夫（図8、9、10）は、恵芝は守護霊がいることをあまり信じず、協力的ではなかった。2019年5月、三輪バイクに乗っていた時に、自動車と衝突して、左足の靭帯が切れた。ホルチン区の病院で靭帯を繋いでもらって、退院した。その後、骨の治療が得意な「包大師」の治療によって、回復は普通より早かった。夫の交通事故を恵芝と「包大師」は、恵芝の守護霊がその夫を信じさせるためだったと認識している。「包大師」の治療効果を認めたその夫は、今は、信じるようになったという。夫の理解を得た恵芝は、弟子入りに専念している。守護霊は、2019年10月の時点で、まだすべて口を開いていない。師匠「包大師」を烏海市からホルチンの自宅に招き、守護霊を招き寄せる修行が続いている。



（図5左側と図6中心）自営の飲食店で料理を作っているとき、飛び散った油で顔と胸部、太ももが火傷したときの恵芝（2018年）。

(図7右側)「包大師」シャマンに弟子入りした後の様子。左側はその娘。



(図8左側) 恵芝の夫の左足の靭帯が切れた時の様子。

(図9中心、図10右側) 病院で靭帯を繋いでもらった後、帰宅して、「包大師」の治療を受けてどんどん治っているときの様子(2019年5月)。

2019年10月、現在、恵芝の夫足が回復し、雨の日でも痛みを感じなく、後遺症が残らなかったと喜んでいる。「師匠のおかげだ、タヤ・ママのおかげだ」と恵芝は言う。恵芝の夫の怪我は痛ましいことで、肉体と経済的に影響を受けたが、恵芝にとって、それ以上に、その夫が「包大師」の力を信じるようになったことの意義は大きい。なぜなら、シャマンになるには、家族の協力なしには、良くできないからである。介添が必要だし、家族の思いがまとまると、家庭円満にも繋がるからだ。

【事例2 師匠の顔が夢に現れた】

ハスゲレル(1976年生、図11参照)・シャマンの弟子サイント(1974年生、図11、12)は、夢によるお告げによって、師匠を見つけた。ホルチン左翼中旗に生まれた彼は、1987年にフフホトに移住した。2013年に、夢に、ハスゲレルの顔と家の様子が映った。その後、自家用車でフフホトから実家に戻って訪ねたが情報を得られなかった。ある日、バイクに乗って、思いのままホルチン左翼後旗に向かって走らせて、師匠ハスゲレルの家に辿り着いたという。2019年10月、調査のため、ハスゲレルの自宅を訪ねると、ちょうど、サイントが、フフホトから師匠の家を訪ねて来ていた。ハスゲレルにこのように、夢に導かれてやってきた弟子がまた数人いるという。サイントは、今、守護霊の力を活かして、フフホトで、骨盤ヘルニアの治療に当たっている。守護霊が治療法を夢で教える、あるいは、感じさせる形で教える。そして、サインとの手と口を通じて、守護霊は治療能力を発揮している。患部に息を吹きかける、あるいは、酒を吹きかける。そして、直接手で触る接触治療を行っている。サイントは、「自分は、故郷を離れてフフホトに住んでいるが、守護霊が自分を後継者として選んだ後、良い師匠と合わせるため、自らホルチンを飛び回ってお探しされたに違いない」と満足した様子で語った。



(図11左側) 左から1は、ハスゲルレ・シャマンの義理の父親 (1952年生) で、2は、ハスゲルレ・シャマン、3は、サイントに紹介されてフフホトからやってきた弟子で、4は弟子のサイント・シャマンである。

(図12右側) 2019年10月11日、師匠ハスゲルレ・シャマンの守護霊の墓参りに向かったが、砂漠の道のため、車が入れなかったため、500mほど遠いところから跪いて礼拝しているサイント・シャマン (左1)。隣はフフホトからの女性弟子。ハスゲルレ・シャマンの弟子は、師匠に感謝しているが、師匠の守護霊に同じく感謝している。



(図13左側) 「包大師」は座りながら、金剛杵を持ち、鈴を鳴らしてタヤ・ママを招請する。ラマが専用の座布団に座って、お経を唱えている光景を思い起こされる。

(図14右側) 「包大師」は、友人シャマンが守護霊を招請するとき、神歌を歌ってあげている (右1)。「包大師」の仏教とシャマニズムに対する柔軟的な態度を伺わせる。そこに、自らの痛みと夢、そして、弟子入りの経験が横たわっている。もっと言えば、靈魂の不死を示す守護霊という存在があるからである。写真は、共に、2018年10月17日 (旧暦9月9日)。



(図 15)

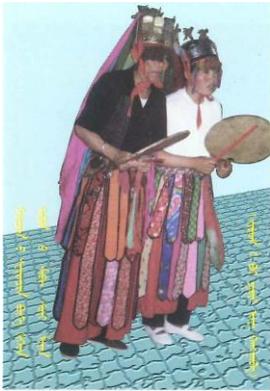
「包大師」が、ボームル・テングリ（天神の1つ）の祭祀を取り仕切っている（中心）。右1は、農民祭主のボヤント（1974年生）。帽子を被るのは、儀礼という非日常におけるしきたりである。普段は帽子を被っていない。左1は、弟子恵芝の弟で、儀礼を手伝っている。こうして、「包大師」への感謝を表わしている。

2018年10月17日（旧暦9月9日）。

【事例3 夢に本の中にあるシャマンの写真を見せてくれた】

ホルチン左翼中旗在住の農民でシャマンの金龍（仮名、1973年生、図17）をシャマンにしたのは、ホルチン地方の名シャマンだったセンゲリンチン（実名、1926-2007）・シャマンの守護霊である。守護霊は、生前、顔色が黒かったので、ハラ（黒い）・ナサ（名前）・ブォ（シャマン）と呼ばれた。「金龍によると、今まで3人の師匠に弟子入りしているが、3回とも守護霊の夢における教えによるものと語る。最初の師匠のところ、2016年にハラ・ナサ守護霊と口を開いたが、信用できないので、夢をたよりに、ホブル・ブォ⁸の娘ウランのところ、弟子入りした。ウランによると、金龍を弟子に取りたくなかった。しかし、夢のお告げがあったと跪いて、必死にお願いされたから仕方がなく入門させた」[サランゴワ 2019:179:180]。金龍がウランに弟子入りする前に、夢にセンゲリンチン・シャマンの顔を見せられた。続いて、ジャロード旗に住む秀美（女性、1973年生）シャマンのところに行くよう告げられた。住んでいる村の名前まで教えてくれた。そこに行くと事前に夢に見せた、センゲリンチン・シャマンの本に載っている写真（図16）が見られると説明してくれた。金龍が秀美シャマンの家に行ってみたら、本当に本を見せられた。そこにあるセンゲリンチン・シャマンの写真が夢に見せてくれた顔と同じだったという。金龍は、書名は言えなかったが、その後の2019年10月29日、携帯を通じて、1998年に出版された『ホルチン・シャマニズムの研究』の中のセンゲリンチン・シャマンの写真を見せたら、「はい、これだ」と確認してくれた。ハラ・ナサ守護霊は、金龍の夢に自分の経歴を紹介したため、後継者だったセンゲリンチン・シャマンは当然でありながら登場する。ホルチン地方で、よく、守護霊を「博捜家（バイチャガル・イヘタイ＝直訳すれば大いなる探し者の意）」と褒め称える。ハラ・ナサ守護霊が金龍にセンゲリンチン・シャマンの写真がどこの誰の家にあるかまで教えてくれたことは、この賞賛語を裏付けることとなる（写真16を参照）。多彩な感覚と実践に由来しているのだ。

⁸ ホブルは、センゲリンチン・シャマンの仮名である。



(図 16 左側)『ホルチン・シャマニズムの研究』に掲載されているセングリンチン・シャマンの写真(左 1) [フレルシャほか 1998 : 写真]。

(図 17 右側) 金龍に降臨したハラ・ナサ守護霊と会話しているウラン(左 1) とセングリンチン・シャマンの孫万寿(仮名、1970 年生) シャマン。2019 年 10 月 9 日、金龍シャマンの家にて。この光景が現実になったきっかけは、守護霊のおかげである。さらに言えば、守護霊の見せた夢である。

「包大師」は、ある人のところに弟子入りすると、夜雄鶏と狼の声を聞こえた。人類学者の石井は、ガーナの精霊司祭者ナナ・サチと一緒に北部州に滞在中に死霊が徘徊する音をきいている。死霊の音をきこえて、表に出ようとしたが、戸口で寝ていた少年に止められた。続いて、様々な存在が通る道の意味を読み解いている[石井 2019 : 37-41]。「包大師」は、その音を聞こえて、音の正体を確認した。そして、タヤ・ママの夢でのお告げに従い、その後の行動を変えた。「包大師」の進むべき道は守護霊と霊界の存在と深く関わっている。

3. おわりに

本稿では、SNS で「包大師」と名乗るシャマンのシャマンになった過程を主に、痛みと夢による導きを中心に記述、分析を行った。タヤ・ママは、「包大師」との人生に与えた影響が大きい。ある意味で、「包大師」をシャマンにただけでなく、その人生をも変えた存在である。教諭の長男として生まれ、成績が優秀だった彼は、シャマン病の痛み(当時は知らないが)によって、学校を中退せざるを得なかった。もし、タヤ・ママの選びがなかったら、そのまま学業に励んでいたと考えられる。守護霊を受け入れた後、お礼の金を受け取ると、何らかの形で出て行くことが繰り返し起こることによって、奉仕精神で生きるしかないと悟って、それを保持している。守護霊は、「包大師」の道徳の模範であり、それによって、自律し、言動を規範している。そして、また、「包大師」の人生で重要な役割を果たしているのは、夢である。それは、守護霊に見せられた霊夢である。守護霊が、夢で治療技術を伝授しただけでなく、師匠になるシャマンをも探してくれた。すなわち、守護霊は、霊体のまま、世を飛び、ホルチン地方のシャマンの家を飛び回り、見たものをリアルに「包大師」に夢という形で

伝えたり、目覚めているときに、見せてくれたりしている。「包大師」にとって、確実な導き手である。夢は、新たな人間関係の構築に影響を与えている。タヤ・ママが生前、ラマとして身に付けた知識と医療技術を「包大師」を通してより良く発揮するには、ラマの導きが必要だった。そのため、「包大師」にシャマンを探してただけでなく、仏教の師匠をも探してくれた。しかも、シャマンと高僧にも「包大師」について、夢を見せ、探すことを促した。このように、「包大師」と未来の師匠にも影響を与えた。「包大師」のこの夢のエピソードを内モンゴル赤峰市バイリン右旗に住むビリグト（1978年生、図21）・シャマンに語り聞かせると、「何というすばらしいことだろう。師匠まで捜してくれているなんて、いい守護霊だ」と喜びながらほめていた。こうして、守護霊は、自分の存在、あるいは、力を示している。そして、シャマンと守護霊、シャマンと師匠、シャマンに必要な人々、守護霊と関係がある他の人々とシャマンとの関係が形成され、つながりが拡大される。「包大師」は、守護霊によって、やって来るクライアントの痛みと心の状態をそのまま受けることがある。すなわち、クライアントと同じ部位が痛みを感じ、クライアントの期待や私心まで感じ取る。そのため、その人に合った治療を行い、その人が必要としている癒しと教示を与えることができる。だから、弟子恵芝のように、心からの感謝の気持ちが自ずと湧き出る。



（図18左側）テムル・シャマン。（図19右側）その妻月美シャマン。共に2013年8月13日（旧暦7月7日）。この日に、祭天儀礼とオボー⁹祭祀を行った後、弟子たちのため、シャマンのイニシエーションである「2つの試練を通る」（①灼熱の饅を口に噛み、②刃物の上を歩き、③火に入れて真っ赤となった犁を踏む）儀式を行った。



（図20）

テムル・シャマンの自宅。

弟子の守護霊を招請している様子。

守護霊タヤ・ママが「包大師」を導いた場所である。

2013年8月13日。

⁹ 山や水の神と天の神を祭る聖地で、石できているのは多いが、木や土できているものも見られる。



(図 21)

オボー祭祀後、守護霊を降ろして、トランス状態に入っているピリグト・シャマン。左側は同僚で助手のバイガルサイハン（仮名）。2019年6月11日（旧暦5月9日）。

参考文献

日本語

石井美保

- ・2019『めぐりながれるもの人類学』青土社
- ・2009「序：メタモルフォーシスの人類学（〈特集〉メタモルフォーシスの人類学）」『文化人類学』74(3)、日本文化人類学会、pp. 414-422

掛谷誠

- ・2018『掛谷誠著作集第2巻 呪医と精霊の世界』京都大学学術出版会

川田牧人、白川千尋、関一敏（編集）

- ・2019『呪者の肖像』臨川書店

サランゴワ

- ・2019『ブォ・シャマニズムの現在—内モンゴル・ホルチン地方の新地平』牧歌舎

田辺繁治

- ・2013『精霊の人類学—北タイにおける共同性のポリティクス』岩波書店
- ・2004「田辺繁治 退職記念講演会 夢と憑依の人類学」

http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/040218_tanabe 2019年9月29日現在

津村文彦

- ・2015『東北タイにおける精霊と呪術師の人類学』めこん

デイヴィッド・エイブラム（結城正美訳）

- ・2017『感応の呪文—“人間以上の世界”における知覚と言語』論創社

モンゴル語

フルレシャ、白翠英、ナチン、ボヤンチョゴラ（編著）

- ・1998『科爾沁薩滿教研究』（horchin・buu・murgul・in・sodlool）民族出版社

（さらんごわ・株式会社カイクリエイツ、スピリチュアル専門書店ブッククラブ回）

My name is “Bao Daishi”-Pain given,
guided dreams and daily practice

Sarangowa

Summary:

In the Horchin region in eastern Inner Mongolia, the number of shamans is currently increasing. To become a shaman, first choose the person whose guardian spirit becomes a shaman. The guardian spirit gives the selected person various pains and informs them of the choice. This is academically called Shaman's disease. Shaman's disease is sympathetic to the suffering of others by suffering mental and physical pain. After becoming a shaman, the behavior of the shaman is governed by the guardian spirit. If you don't protect it, you will be in pain. As a result, Shaman refrains from acting. The guardian spirit has a variety of dreams for Shaman patients. Tell your dreams the person who will teach you treatment and become a teacher. As a result, Shaman disease forms new relationships. It continues after it becomes a shaman. The connection between the shaman and the guardian spirit and the shaman and the person is activated and expanded. That includes the growth of humanity.